

# 小学校の外国語活動における 英語絵本の活用についての調査研究

師子鹿 元 美

An analysis of the survey results on the use of  
English picture books in elementary schools

Motomi SHISHIKA

## 【要 旨】

小学校外国語活動が必修となり、小学校5年生、6年生に週1時間、年間35時間が行われるようになってからおよそ7年が経過した。さらに、5年生、6年生に英語を教科とすることが中央教育審議会に諮問され、平成32年度からの本格実施に向けて検討が始められた。ある程度外国語活動のスタイルが定着した一方で、外国語や外国語教育の資格を有していない教員が多く、自分の指導力に不安を持ち、研修を望む声も多い。文部科学省が今年小学校中学年用の補助教材として開発した絵本教材を発表したこともあり、外国語活動における絵本の活用への興味関心が高まっているといえる。大分県S市では今年6月に絵本・歌の活用を主にした小学校外国語活動研修を実施した。本稿では、その研修の参加者から回収したアンケート結果を分析し、参加者が望む研修、また参加者自身の研修への取り組みについて考察をした。

## 【キーワード】

小学校外国語活動 英語絵本 読み聞かせ 小学校教員研修

## 1 はじめに

小学校における外国語活動は、学習指導要領の改訂により平成23年度からは小学校5年生、6年生に対して必修となり、年間35時間行われている。学習指導要領では、「担任が主となって行うこと」となっており、担任の負担は大きいと言える。現在行われている外国語活動については、約7割の児童が外国語活動について肯

定的な考えを持っていて、中学生の約8割が小学校で行った外国語活動が中学校の外国語を学ぶ上で役に立っていると考えていることが調査結果から明らかになっている（文部科学省、2015）。特に「英語で簡単な会話をすること」「英語の発音を練習すること」が役に立ったと考えており、小学校外国語活動の目標である「外国語の音や表現に慣れる」という点では成果を上げていると考えられる。また、外国語活動を担当する教員の9割弱が、外国語活動の

「おおよそのイメージはつかめている」と回答し、約9割が外国語活動を「児童と一緒に楽しんでいる」と答えていることも明らかになっている。必修化後、ほとんどの学校で学級担任が授業に関わるようになり、外国語活動をどのように進めればよいかもつかめてきて、楽しみながら行っていることがうかがえる。しかし、外国語や外国語教育の資格を持っていない指導者が多く、自分の「指導力」を課題だと考え、外国語活動に関する研修を望む声も多くなっている(文部科学省、2015)。

平成26年11月には、「グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力」をつけるため、小学校中学年から外国語活動を開始し、高学年で教科とすることが検討され始めた(文部科学省、2014)。中学年から外国語活動開始を見据えて、文科省は「小学校の新たな外国語教育における補助教材[Hi, friends! Story Books]として絵本教材を開発し、研究開発学校等においてその効果の検証を始めた。絵本の読み聞かせを通して、児童は多くの英語を聞く機会を持ち、絵本の絵から様々な情報を読み取って、内容の理解へと進んでいく。いろいろな工夫をすることで、児童の発話も引き出すことができ、バラエティーにとんだコンテキストのなかで、意味のある文脈のなかで英語に触れていくことができる(エリス&ブルースター、2007)。小学校教員は、日本語による読み聞かせにも精通しており、英語絵本は小学校での英語教材として取り入れる価値のあるものだと考えられる。多くの子どもは幼少のころから絵本を読み聞かせてもらった経験を持っており、馴染みのあるお話も多い。しかし、英語教材として絵本を活用することは小学校教員にとってはなかなか難しい。本研究では、S市が平成28年6月に実施した「小学校英語教育基礎研修」の一環として、筆者が「小学校外国語活動における絵本や歌の活用について」と題して行った講義内容について、参加者にアンケート調査を行い、調査結果を分析した。

## 2 英語絵本の活用

英語絵本の活用については多くの先行研究があり、英語教育における英語絵本の効果が検証されている。山崎・菅野(2008)は、中学校1年生を対象に、「小学生にCorduroy's Best Halloween Ever!の読み聞かせをしよう」という6時間からなる単元を設定し、その中でParticipatory Approach(参加型アプローチ)の実践を試みた。4時間かけて読み聞かせの準備を行い、5時間目にグループに分かれて、小学校6年生に絵本の読み聞かせを行った。

又野(2014)は、絵本“The Very Hungry Caterpillar”の読み聞かせを公立小学校で行った実践報告と、中学校外国語科の授業への接続についての提案を行っている。この絵本では、曜日、数、果物、色、食べ物などの語彙が多く含まれており、読み聞かせ前には、写真や絵カードを使って果物と数の導入を行い、チャンツを使った繰り返し練習を行った。さらに、理科で習ったことと関連させて、ちょうの一生を模型や絵カードを使って提示し、関連する英語を導入している。読み聞かせ中には、教師(語り手)は児童が読み聞かせに参加するようさまざまな方法を用いて、互いに相互交流をしながら内容理解を進めていった。読み聞かせ後には、ゲームを通して語彙や内容の確認を行った。振り返りでは、読み聞かせ中に、児童から積極的な発話が見られ、「中学校の英語が楽しみになった」「このような授業を早くやってみたい」という中学校での英語授業に向けた前向きなコメントや、「絵やジェスチャーなど」を使って「何度も繰り返して言ってくれたのでわかりやすかった」「知っている単語もあってわかりやすかった」などのコメントがあったことが報告されている。

的場・佐藤(2012)は、小学校6年生59名にプロジェクト型カリキュラムとして英語劇の指導を行った実践結果を報告している。筆者が絵本をもとに台本を用意し、週1回の授業を3か月間行って準備をし、全校児童の前で発表を

行った。ほぼ全員の児童が英語劇を楽しんでいい、英語劇の活動を通して英語に対する意識や態度が改善されたことがアンケート結果から明らかにされた。

田縁(2010)は、2006年に開校した私立小学校での、電子黒板を使った絵本の読み聞かせについて紹介し、その効果を検証している。小学校3年生、4年生に絵本の読み聞かせを行う活動から、絵本を電子黒板に大きく映し出し読み聞かせを行う活動へとスタイルを変えていった。児童は黒板に映し出される英文も追いながら聞くことで自然とアルファベットの文字に触れ、慣れ親しむようになった。それから児童全員で絵本の音読へと進んだ。指導2年目には次のような5つの活動を行い、児童の好むには次のような5つの活動を行い、児童の好む活動を調査した。5つの活動は①絵本を手にして1人で黙読、②絵本を手にして1人で音読、③絵本を手にして2人で音読、④デジタルで読み聞かせを聞く、⑤デジタルで全員で声を出して音読をする、である。

①黙読と⑤音読(全員)を1位に上げた児童が多く、読みが苦手な児童は、全員で声を出して音読をする活動を好むという結果がでた。

大川(2014)は、小学校5、6年生229名を3つのグループに分け、絵本を使った「読み聞かせ」、「読みあい」、「なぞり読み」の3つの活動を、それぞれのグループに授業の最初5分間で4回行い、「情意面」「聴解力」「発話力」の3点において分析している。「読み聞かせ」は教員が読み、児童が聞く活動である。「読みあい」は教員が読む間、児童が絵本のある部分を教員と一緒に声を出して話す活動である。「なぞり読み」は児童一人ひとりが小型の絵本を持ち、教員が読む間、ある部分の文字をなぞりながら声を出して読む活動である。「情意面」では、「なぞり読み」が一番楽しさに欠けるという結果が出た。「聴解力」では、どの活動もある程度の効果が見られ、「発話力」では、「なぞり読み」が最も効果があったことが報告されている。

### 3 研修での講義・演習概要

この研修では、参加者が英語絵本の特徴や利点、授業での使い方などについて知識を持ち、歌や絵本を使った英語活動を体験的に学んでいくことを目的とした。全体で3時間30分の研修時間を、表1にあるように「絵本・歌の活用」「授業の準備」「提案授業」「授業案作り」「発表」の5つに分けて行った。「絵本・歌の活用」では、英語絵本の特徴、英語絵本を使う利点、授業で英語絵本を上手に使うためのポイント、歌やチャンツの取り入れ方について講義を行った。絵本については、子どもの発達に有効な教材であること、また大人にとっても癒しの効果があるとされ注目されてきている(山崎、2008)。さらに、英語絵本は簡単な英語で書かれているものも多く、英語絵本の持つ文化的要素、ストーリー性、挿絵、言語的特徴などから授業での活用に関心が高まっている。特に研修では、「英語で英語を理解する」こと、すなわち幼児が母語を習得していくように、日本語を介さず英語を習する子どもの姿をイメージしてもらいたいと思った。視覚情報により日本語を介さずに内容理解へと進むことが期待できる、話の筋を追うことで、意味のあるコンテキストの中で、英語に触れていく事ができる点が英語絵本を使うメリットである。しかし、絵本の選定については、子どもたちが興味をしめすものと教師が授業でそれをどのように使うかという、子ども側と教師側の両面からなされている(山崎、2008)。ここでは、特に絵本の挿絵から、子どもが心にお話の世界を作ること、お話をイメージすることを強調した。さらに、実際の読み聞かせの方法と関連するが、読み聞かせの成功のポイントは、子どもとお話の世界を共有するために、子どもとのインタラクションの重要性を説明した。どのような絵本を選ぶかについて、「パーフェクトレッスンプラン絵本編」(2001)にある「絵が楽しく、絵と英語が一致しているもの、英語が簡単で一文が短い」絵本を初級者に、中級者には「話にストーリー性が

あるもの、基本的な単語（色、数、形など）が使用され、同じ表現が繰り返されるもの」をポイントとして紹介した。

「授業の準備」では、授業で重点を置きたいこと、すなわち、異文化理解、表現、単語なのかを決定し、それに沿って絵本を選び、教材研究を十分に行うことを説明した。授業の構成では、児童に絵本を聞きたいと興味をおこさせるための読み聞かせの前の活動(Pre-Storytelling)、児童にお話の内容を理解させ、興味、想像力を高めるための読み聞かせ活動(While-Storytelling)、話の内容、出てきた表現、単語、文化についての児童の理解を確認またはさらに深める活動(Post-Storytelling)（又野、2014）を紹介した。成功のポイントとしてもあげたが、読み聞かせ活動では、教師と児童がやりとり（インタラクション）をすることが大事であることも説明した。「模擬授業」では、“Where’s Spot?”という絵本を使い、実際に読み聞かせの3段階 Pre, While, Post でどのように行うかを提案した。この絵本は、夕飯に戻って来ないスポットという子犬をお母さんが探すという内容で、部屋のあちこちを開けるといろいろな動物が出てくるフリップ絵本になっている。“Where’s Spot?” “Is he in ~? Is he under?”という同じ表現が繰り返され、日本語で訳されたものは幼児にも読み聞かせされているようだが、英語を始めたばかりの児童には適していると思われる。特に、読み聞かせ活動(While-Storytelling Activity)として、(萬屋、2009)を参考に、「英語による Yes-No question (Yes-No QE)」「英語による Wh 疑問文 (Wh-QE)」「簡単な単語をリピートさせる (Repeat Prompt)」、「文の途中まで言い、子どもにその後を言わせる (抑揚は上昇調) (Completion Prompt)」「子どもの返答を受けられる言語反応 (Acceptance)」をインタラクションの方法として紹介し、“Where’s Spot?”の絵本をどのようにインタラクションをするかを提案した。次に実際に参加者に児童になってもらい、筆者が読み聞かせを行った。「授業案作り」では、参加者を4人ずつのグループに分け、

「はらぺこあおむし」の英語絵本を使ったレッスンプラン作りに取り組んでもらった。「はらぺこあおむし」の絵本は子どもたちにも人気のあるもので、英語絵本を使っても内容は理解できると思われる。最後にグループごとに全部を通して発表してもらった。

## 4 調査方法

### 4-1 調査の時期・対象

S市が6月9日、10日、11日に行った「英語教育基礎研修」への参加者にアンケート用紙を配布し、研修後すぐに研修内容についてのアンケート用紙に記入してもらった。3日間それぞれ異なる参加者に、同じ内容の研修を行った。参加者99名全員からアンケート用紙を回収できた。

### 4-2 質問項目

研修内容について、表1にあるように①～⑩について、5段階（5：実践のためにとても役にたった、4：実践のために役にたった、3：どちらとも言えない、2：実践のためにあまり役にたたなかった、1：実践のために役にたたなかった）に分け、それぞれの数字を選択してもらった。アンケート用紙の最後に研修についての感想やコメントなどを書くための自由記述の欄を設けた。自由記述の中には、さまざまな内容が入っており、内容ごとに分類し分析対象とした。対象とした項目数は151個であった。

### 4-3 分析方法

質問項目①～⑩については平均値を求め、自由記述については、記述内容を大きくカテゴリライズし、カテゴリごとにさらに小さくカテゴリライズしてそれぞれの割合を求めた。



表 1

研修内容と参加者による評価				(N=99)
	主な内容	MD	とても役に立った 人数	役にたった 人数
I 絵本・歌の活用	①英語絵本をなぜ使うか	4.3	40	53
	②英語絵本の特徴	4.3	38	56
	③英語絵本“keys to success”	4.1	22	63
	④歌・チャンツの取り入れ方	4.3	45	45
II 授業の準備	⑤どのような準備が必要か	4.2	38	49
	⑥授業の構成を考える	4.3	36	55
III 提案授業	⑦“Where's Spot?”を使った提案授業	4.5	58	36
	⑧絵本の読み聞かせ練習	4.5	56	36
IV 授業案作り	⑨“The Very Hungry Caterpillar”を使った授業案作り	4.3	48	44
V 発表	⑩それぞれのグループの発表	4.6	64	33

## 5 調査結果

### 5-1 研修内容についてのアンケート調査結果

研修の「絵本・歌の活用」で一番「とても役にたった」と評価されたものは「歌・チャンツの取り入れ方」であった。「とても役に立った」と「役に立った」を合わせると、「英語絵本をなぜ使うか」と「英語絵本の特徴」が評価された。「英語絵本“keys to success”」は一番評価が低かった。「授業の準備」では、どちらもほとんど同じ評価であった。「提案授業」は全体でも高い評価を受けており、「“Where's Spot?”を使った提案授業」「絵本の読み聞かせ練習」のどちらもそれぞれ58名、56名が「とても役にたった」と答えており、参加者の半数以上が強く評価している。「授業案作り」は参加者の約9割が「とても役に立った」「役に立った」と考えている。「発表」では、それぞれのグループが発表をしたが、全体でも一番高い評価を受けており、参加者の約65%の人が「とても役にたった」と高く評価している。「とても役に立った」と「役に立った」と答えた人は合わせて97名になり、99名の参加者のうち2名を除く全員

が「役に立った」と非常に高く評価していることがわかる。

### 5-2 自由記述の調査結果（全体）

アンケートの最後に感想やコメントを書く欄を設けたが、参加者99名のうち91名から回答をもらった。そのうち3割近くは3文以上の内容の多い記述であった。一人の自由記述の中には、さまざまな要素が含まれていることもあり、それぞれ要素ごとに分けると、151個の項目ができた。その151個を大きく「知識・発見」「将来・展望」「経験」「研修・姿勢」の4つに分類し、さらにそれぞれを細かく分類をして分析をした。

「知識・発見」には、「～がわかった」「～を知った」「～を学んだ」など、知識を得たり発見があったとするカテゴリーである。自由記述のカテゴリー別では一番多い50個の回答があった。「将来・展望」は「～に取り組みたい」「～を行いたい」「～したい」など、研修後の意欲を示したカテゴリーで、38個の回答があった。「経験」は、「～に楽しく参加した」「～をしてイメージが湧いた」「初めて～を体験した」など、研修で具体的に経験したことを述べたものをまとめると37個の回答があった。「研修・姿

勢」では、研修全体についての記述や、自分自身の研修に臨む姿勢などを述べたものをまとめた。21個の回答があった。

表2

自由記述 (カテゴリー別)		
知識・発見	50	34
将来・展望	38	26
経験	37	25
研修・姿勢	21	15
	(個数)	(%)

### 5-3 自由記述 カテゴリー「知識・発見」の分析

「知識・発見」のカテゴリーの50個の回答をさらに細かく「絵本」「方法」「内容」「その他」の4つに分類した。「絵本」は絵本そのものについての記述で、「英語絵本という製品が新鮮」「絵本が教材として有効」「絵本そのものが優れた素材である」といったものを含む13個の回答があった。「方法」は絵本をどのように使うかについての記述で、「他教科との関連」「読み聞かせの3段階 (pre-while-post) がわかった」「単元を見通した活動」などを含む22個の回答があった。「内容」は特に絵本の内容についての記述で、「単語も簡単で取り組みやすい」「ストーリーがある絵本は苦手意識のある子どもでも楽しく学習できる」「絵本で使われている言葉は英語の習得に役立つ」といったものを含む5個の回答があった。「その他」には、「本格実施に向け準備する必要がある」「絵本の活用にはしっかりとした教材研究が必要」などを含む10個をまとめた。

表3

カテゴリー「知識・発見」		
絵本	13	26
方法	22	44
内容	5	10
その他	10	20
	(個数)	(%)

### 5-4 自由記述 カテゴリー「将来・展望」の分析 (キーワード、キーフレーズ)

「将来・展望」では、今後「外国語活動を実践したい/取り組みたい」と記述しているものと、「自分自身が外国語活動に向けてどのようにしていくか」を記述したものに分けて分析した。「実践」では、単に「英語絵本を取り入れたい/英語絵本の読み聞かせを取り入れたい/読み聞かせをしてみようと思った」などと回答しているものが多くあったが、表4にあるように、取り組む際の姿勢や心構えなどをあわせて記述している解答もいくつか見られた。「自分自身」については、「発音練習や英語絵本を読むこと、ALTと積極的にコミュニケーションをとること」を挙げている回答があった。

表4

カテゴリー「将来・展望」 (キーワード、キーフレーズ)	
実践したい	自分が楽しむ 恥ずかしがらず 臆せず 取り組む 苦手意識をはねのける Hi, friends 以外の教材を探す視点 絵本を目や指で追う子どもの姿を目標
自分自身	発音練習 英語絵本を読む ALTとの積極的なコミュニケーション

### 5-5 自由記述 カテゴリー「経験」の分析 (キーワード、キーフレーズ)

「経験」には、研修でどのような体験をしたか、またどのような体験が楽しかったか/良かったかなど自分の体験を記述しているものをまとめたが、その中で表5のようなキーワード、キーフレーズが見つかった。「絵本を使った授業/授業作り」「グループの活動」「読み聞かせの体験」などは複数の回答があった。

表5

カテゴリー「経験」(キーワード、キーフレーズ)	
授業作り	英語を使った授業 グループでの活動 (授業案作り 発表) 絵本を使った授業 先生たちとの交流 読み聞かせの練習 子どもの気持ち 読み聞かせの体験 (楽しい)

## 5-6 自由記述 カテゴリー「研修会・姿勢」の分析

「研修会・姿勢」には、研修会全体についての記述をまとめたが、表6のような「楽しかった、実践的であった、わかりやすかった」などの肯定的な記述が多く見られた。そのほか、研修会の進め方についてや、自分の研修に臨む姿勢などの記述も見られた。発音練習についての要望や、発表の進め方についての要望もあった。

表6

カテゴリー「研修・姿勢」  
(キーワード、キーフレーズ)

楽しかった	実践的であった	参考になった	わかりやすかった
有意義	ためになった		
おもしろかった	グループに1冊絵本があつて良かった		
	教材研究のアイデアをもらった		
	1年の担任なので 子どもにどのような質問をすれば楽しくできるかを考えて聞いた		
	授業の作り方 どんな視点で考えるかなどが分かりやすかった		
	発音練習をしたかった	発音の振り返りをしたい	先輩の先生方の考え

## 6 考察

### 6-1 研修内容全体について

今回の研修では、参加者に英語絵本の特性や利点を知ってもらうと同時に、歌や絵本を使って楽しい英語活動を体験的に理解してもらうことを狙った構成とした。易しい英語で書かれた英語絵本や英語の歌を使うことで、指導者としての教員は外国語活動に一目取り組みやすいと感じるであろうが、内容的には小学校高学年の児童の精神的発達年齢にはそぐわないと思われる絵本も多い。英語絵本の特徴を踏まえ、外国語活動において絵本を使うという視点は参加者にとって新鮮だったのではないだろうか。参加者の約6割を超える人が「とても役に立った」と答えた「それぞれのグループの発表」では、さまざまな絵本の使い方を学べたのではないだろうか。絵本を使う理由、絵本の特徴について

説明を受け、ある程度理解した上で、「新しい考えはなじみのある方法で紹介されるとより容易に学び保持することができる」ということから、グループで授業案について意見を出し合い、考えたことでそれぞれの参加者が絵本の取り入れ方について具体的に学び、そのことを実感できたことがわかる。絵本を取り入れた授業を成功させるために必要なことを説明したが、机上のことで実践経験がない場合は実感できないかもしれない。「児童をお話に引き込む」ための準備として、教師自身が何度もその絵本を手に取り、読み、理解することを強調したが、その点は参加者に意識に残ったことがアンケートの自由記述「将来・展望」から読み取れる。読み聞かせをする際の3段階については、提案授業の中で体験し、さらにグループ発表をするなかで理解が進んだことが自由記述で読み取れるが、説明を受けただけでは実践のイメージが湧かないと思われる。

「提案授業」で使った絵本“Where's Spot?”は、内容的には幼児から小学校低学年用だと思われるが、「児童を読みに参加させる活動」ということでいくつかの技法(寺井、2009、萬屋、2009)の説明を受けたことで、高学年での外国語活動に使えるという気持ちになった参加者も多くいたようだ。

グループ内での絵本“Where's Spot?”の読み聞かせ練習では、他の参加者の読みを聞くことも参考になったと思われる。グループでの「授業案作り」は、どのグループに入っていたかが評価が分かれた一つの原因だと思われる。さらに、意見が活発に出されるグループ、出された意見をうまくまとめてくれるリーダー的存在がいるグループ、積極的に発言をしない参加者が多いグループなどグループ内の要素と、個人的な要素が絡みあった評価だと思われる。

### 6-2 自由記述について

今回の研修は市教委主催のもので、研修後に市教委側がアンケート用紙の回収をしたことで参加者全員から回収できた。さらに最後に設け

た6センチ×19センチの四角の自由記述欄には、どのような知識を得たか、どのような学びがあったか、それらをどのように今後に生かしていくかなど、内容の濃い記述がたくさん見られた。枠いっぱい記述しているものが30枚近くあり、参加者が絵本・歌の活動だけでなく、外国語活動全般についていろいろな思いを持っていることがうかがわれた。

この研修が「絵本・歌の活用」にしぼった内容であったので、当然のことであるが絵本の内容、使い方などについて新しい知識や発見があったとする記述が多くあった。研究指定校などを除き、一般の小学校で英語絵本を担任や専科教員が授業に取り入れている例は少ないと思われる。英語絵本が教材として使えるという視点を得ることは、英語絵本を取り入れた授業実践を考える上では、第一歩であるが、とても大事な点である。その視点を得ることが出来れば次に、実際に自分が絵本を手に取り、読み、授業で使う絵本を決め、その絵本について教材を研究（何をテーマとして使うか）を行い、実際の授業の構成を考え指導案を作成し、授業へと進むことになる。参加者はそれぞれの外国語活動の実践年数、取り組みの度合い、興味、関心の程度などに応じて、授業までの各段階に関する記述をしていると考えられる。

外国語活動を「恥ずかしがらず、臆せず、苦手意識をはねのけて、楽しんで」行おうと、英語に対するマイナス意識を何とか克服している小学校教員の現実の姿も浮かび上がった。英語を教えるのではない、「態度の育成」だとわかっているにもかかわらず、英語教育の資格を持たない多くの教員が、英語を話すことや授業の組み立てを求められるわけで、不安はとても大きいものであるといえる

## 7 まとめ

文部科学省が、今年「中学年を対象とした絵本活用に関する基本的な考え方」を出し、補助教材の英語絵本を発表したことで、今回の「絵本・歌を活用」を主とした研修会は時宜を得た

ものとなった。今回のアンケートでは、外国語活動の経験年数や性別、現在の担当学年など参加者の属性について問わなかったため、経験年数や男女別に調査結果を比較できなかったことが残念である

研修では、講義の中で知識や技術を得ることと、それを実際に体験することの両方をセットにすることで参加者の満足度や理解度が上がることがあらためて確認できた。積極的にコミュニケーションを図る態度を育成することが求められている小学校外国語活動において、いかに教室という限られた空間の中で本物の場面を設定し、意味のあるやり取りをするかが成功のカギを握っていると考ええる。そのために英語絵本はさまざまな可能性を与えてくれるものだろう。必修化後7年が経過しようとしている現在、小学校教員の多くが外国語活動に何かしらの関わりを持ってきたと思われる。担任主導の外国語活動というスタイルも定着し、既存の教材をもとに外国語活動を何とか行っているが、行き詰まりを感じている教員もいると思われる。英語絵本という視点が外国語活動の枠をさらに広げていくであろう。英語絵本の授業実践例を増やし、実践例からあらたな問題点、課題を見つけ、まだまだ深まりの可能性も持っていると考ええる。今回の研修は実践するために役に立ったと高い評価を受けたが、研修後、参加した教員が英語絵本を取り入れた授業をどのように実践しているかなどを検証できる機会があればと思う。

## 引用文献

- 大川陽子・畑江美佳、太田淳二、岡山脩、深見好展、藤原正侑子、矢野由紀子、吉廣郁美、長野仁志、大宮佳世子、永井まさみ（2014）「高学年児童に合った『英語絵本』の活用法」『鳴門教育大学授業実践研究－学部・大学院の授業改善を目指して－』第13号、53-62
- G. エリス、J. ブルースター（2008）『先生、英語のお話かせて！』 玉川大学出版
- 田縁真弓（2010）「小学校英語とICT—私立小学校での



- 実践から—』『コンピューター&エデュケーション』  
vol. 29 : 30-35
- 寺井正憲編著 (2009) 『聞き手参加型の音読学習』 東洋館
- 又野陽子 (2014) 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における絵本の活用方法—絵本 *The Hungry Caterpillar* を教材として—」『中国地区英語教育学会研究紀要』 No. 44、81-90
- 松香フォニックス研究所 (2001) 『パーフェクトレッスンプラン絵本編 初級・中級』
- 的場雄樹・佐藤臨太郎 (2012) 「小学校外国語活動におけるプロジェクト型カリキュラムの実践と効果—桜井市立三輪小学校における英語劇活動を通して—」『奈良教育大学 教育実践開発センター紀要』 第21号、179-182
- 文部科学省 (2014) a 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」
- 文部科学省 (2014) b 「外国語活動の現状・成果・課題」『英語教育の在り方に関する有識者会議 (第3回) 配布資料』
- 文部科学省 (2015) 「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」
- 山崎友子・菅野弘 (2008) 「Participatory Approach の試みに向けて—附属中学校生による小学生への英語の絵本の読み聞かせの実験的授業— (第1報)」『岩手大学英语教育論集』 第10号、43-48
- 山崎友子・James M. Hall・菅原文江・高橋長兵・菅野博 (2011) 「小学校と大学の連携による英語活動教員研修—英語絵本の活用法を取り上げて—」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』 第10号、11-12
- 萬谷隆一 (2009) 「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要』 第60巻、第1号、69-80